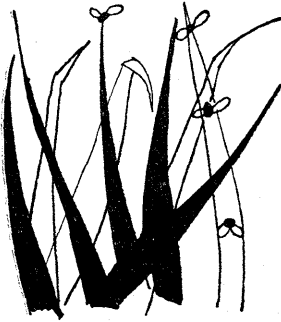


## エリクソンと幼児教育 (11)



仁科 弥生

### 同一性について

今回は、エリクソンが生み出し、今や人口に膾炙している「同一性」identity という言葉の意味するところについて考えてみたい。

エリクソンは「同一性」という言葉を、彼の「乳児期と幼児期初期の諸問題」(一九四〇年)という論文の中ではじめて使っている。しかし、彼によれば、この同一性という言葉には二人の始祖がいるという。すなわち、一人はW・ジェームズであり、もう一人はフロイトである。ジェームズは、「人格的同一性」という言葉で客体としての私の「連続性」と「斉一性」を表現しているが、エリクソンは、ジェームズが指摘した「これこそが真実の私だ」という場合の「生ける斉一性と連続性という主観的感觉」に注目している。フロイトは、彼がユダヤ人の支部集会にあてた手紙の中でユダヤ人社会と彼との結びつきについて言及したとき、この言葉を用いている。すなわち、自分とユダヤ人との間には「同一の精神

構造に由来するひそやかな心安さ」があり、その根本的な絆は、宗教や民族的誇りではなく、言葉にならない強い情緒と、「内的同一性」の明確な意識であると述べている。そしてフロイトは、ユダヤ人を祖先とすることに負うところが大きいと感じている自分の二つの特性として、一つは知性の幅広い活用を制限するような偏見にはけっして捉われないこと、そして今一つは、敵対するものにあらがって生きる心構えのあることをあげている。これについて、エリクソンは、「同一の精神構造を内にもつ」という表現には、エリクソン自身が「同一性」という用語で概念化しようとしているものがすでに暗示されているとみなしている。すなわち、そこにはフロイトの属するユダヤ民族の、その特異な歴史によってつちかわれた固有の価値観と一人の人間フロイトとの絆が指摘されており、それは、一つの集団の内的な統一の本質をなす価値観とその個人の核心をなす特質との一致に他ならないという。つまり、同一性というエリクソンの概念には、自己自身の中の永続的な斉一性という意味と、あ

る種の本質的な性格を他者と永続的に共有するという意味とが包含されているということが示唆されているのである。

さて、エリクソンはこの言葉を彼の臨床的経験を理論化するために用いたのであった。彼は「とくに社会構造が変化する時代の多くの人々にとって、同一性は食物と安全、性的満足と同じくらいに重要なものであり、「乳児期と幼児期初期の諸問題」また「われわれの時代においては、同一性の研究が、フロイトの時代における性愛の研究と同じくらいに戦略上重要となる」（『幼児期と社会』一九五〇年）と、その概念を位置づけ、その後、同一性とは「個人の中核、さらにまた、彼の共同体文化の中核に『位置する』一つのはたらきであって、まさにこれら二つの同一性の一致を確立するはたらきである」（『主体性―青年と危機』一九六八年）と定義していることからわかるように、その概念を繰返し使用し、またそれに特定の意味を与えようと何年にもわたって研究をつづけたのであった。とくにアメリカへの移住や戦

争が彼の仕事や人生に及ぼした影響の中で、その概念が発展をとげたことは特筆すべきであろう。たとえば、戦争神経症患者である三〇歳の海兵隊員について、「私もっとも深く印象づけられたことは、この種の人たちに同一性の意識が失われていたことである。彼らは自分が誰であるかは知っていた。彼らは個人的な同一性をもっていた。けれども、主観的には、彼らの生活はもはやばらばらであり、再び一つにまとまることはないかのようにであった。そこには、当時、私が自我同一性と呼びはじめたものの中心的な障害があったのである。この時点では、この同一性の感覚が、自己を、一貫して同じ自分であるという連続性と斉一性のある存在として経験し、またそのように行動する能力を準備すると述べるだけにとどめておく。」(『幼児期と社会』)という彼の記述がある。

次に、エリクソンが同一性のはじまりを例証した、放火魔になった五歳の爆撃手の息子の臨床例を紹介しながら、話をすすめよう。

おとなしい「お母さん子」であった少年が急に乱暴になり、はては放火をするようになった。両親は別居中で、彼は母親と母親の従姉妹たちと生活していた。この従姉妹たちは彼の父親のことを露骨に悪し様に言っていた。したがって彼にとって父親は同一化の対象とはなりにくかった。ところが戦争が始まり、父親は空軍に入隊して手柄をたて、たちまち英雄となった。休暇で帰ってきた父親は町中の人の賞賛的となった。母親は離婚をしないことにした。しかし、戦線に戻った父親は、まもなくドイツ空軍との戦いで戦死したのであった。父親が出發し、そして戦死してからというもの、それまでは従順で、やさしかったこの少年は、ものを壊したり、公然と母親に反抗するようになり、遂に放火するまでになった。彼が母親に折檻されたとき、彼は自分が放火した薪の山を指さして叫んだ。「もしここがドイツの町だったら、これで母さんは僕を気に入ってくれたはずだ。」この言葉は、彼が放火したとき、いろいろと手柄話をしてくれた父親のように、自分も空軍の爆撃手になった空想に

ふけていたことを暗示しているが、エリクソンはこの症例を次のように分析している。

母親に気に入られるように「いい子」になろうとして、いわば女性的同一化を身につけた少年にとって、突然、父親が新たに活力を与えられた理想の人物となったが、同時に、母親の愛情を奪い合う競争相手として具体的な脅威となった。そこで、彼は男の子が果たした女性的同一化の価値を切り下げ、性的ならびに社会的役割の認識の混乱からぬけ出すために、できるだけ早々自分の同一化を編成し直す必要にかられた。ところが、そのとき、父親が戦死したのである。その事実、父親に競争心を抱いたことに対する彼の罪悪感を強め、彼の新しい男性的自発性を萎えさせ、環境への適応をむつかしくしたのであった。子どもたちは歴史上の人物や地域の価値観、政治的イデオロギーを、善悪の原型として受け入れる。しかし彼が生きている現代の社会で提供される同一化のモデルの中には、彼の同一化の断片が役に立つ組合せと異なるような社会的に意義のあるモデルは少ない。この少

年にとって、空軍の爆撃手という役割が、芽生えはじめた同一性を構成するさまざまな要素の統合の一つの可能性であったのかもしれない。エリクソンは、それらの要素として次のものをあげている。彼の活発な気質、男根―移動の発達段階、エディプス期と社会的境遇、知的能力、父親の気質（すぐれた軍人としての気質）、当時の歴史的模範（攻撃的な英雄）などである。

普通、このような要素の統合が成功した場合には、体的、気質的、そして学習された諸反応が凝集して、豊かな成長を生み出し、目をみはるような成果をあげる。しかし、それらの統合に失敗すると、激しい葛藤が生じ、思いがけない悪戯や非行となって表現されることがあるという。なぜなら、子どもは自分を連続性と斉一性のある存在として自分の同一性を自分なりに統合しようとする結果、あえて反社会的な行動をとらざるをえなくなることもあるからである。しかし、やがてこの少年の自我が成長し、自発性が適切な方向に発揮されて、彼の葛藤が解決されたのを、エリクソンは観察し、この問題

についての彼の解釈の正しさの確証をえたのであった。すなわち、少年が自転車に乗り、奇妙な声を発しながら、風を切って坂道を疾走する姿をエリクソンは目撃したのである。まわりの仲間たちをほらはらせ、しかもぶつからないように彼らを上手に避けて、自転車を飛ばした。彼自身は再び爆撃の任務を帯びた飛行機を空想していることは明らかに推察されたが、しかし、今では、自分の運動能力を駆使して、慎重に振舞い、仲間を受け入れられていた。つまり、彼は遊びの中で自分の運動能力を統御することを学び、仲間に賞賛される自転車乗りの名手になったのである。

このように、同一性は、自分が依存している人々のように自分もなりたいたいと願い、また時にはなるように強要され、その通りになった幼児童期の同一化のすべての統合と、自己像の総和を含むが、しかしそれは、その各部分の単なる合計ではない。それ以上のもの、すなわち新しい同一化の配列に自己を統合し直すことを意味する。たしかに言語的にも心理的にも、同一性と同一化は共通

の根をもっている。しかし同一性はより早期に形成された同一化群の単なる総和ではない。たとえ子ども時代の同一化群がいくら積み重ねられようとも、一個のパーソナリティの働きをもたらすことはできないという事實は、同一化の機制の有効性が限られたものであることを示すものであると、エリクソンは指摘する。

さまざまな発達段階にある子どもたちは、現実的であれ、空想的であれ、自分たちももっとも直接的に影響をうける人々の「部分的な側面」に同一化する。たとえば親との同一化は、親の過大評価されるか誤解された能力や役割の現われなどに向けられることが多い。しかもこれらの部分的側面は、それらが社会的に受け入れられるからではなく、むしろそれらが、社会的現実に対する現実的な予測には徐々にしか従うようにならないという幼児的空想の性質によって助長される。しかし「青年期の終りに確立される最終的な同一性は、過去の各個人とのどんな同一化をも超えたものである。つまり、それはすべての重要な同一化を包括するが、しかもこの同一性

は、それらの同一化から独自で適切なまとまりをもった全体を形成するようにこれらの同一化群をつくりかえてしまう」(『自我同一性』一九五九年)という。したがって、同一性の形成過程の幼児童期における断片的な経験が自我によって選択的に再生、要約され、新しいまとまりをもつ経験へと再統合されるという統一化の過程であるととらえることができる。

ところで、エリクソンは同一性という概念の説明にあたって、同一性、自我同一性、自己同一性、集団同一性など、いくつかの用語を多義的に用いている。また、エリクソン自身が指摘しているが、同一性という言葉には、たとえばG・ミードによる自己概念やH・サリバンの自己組織など、他の研究者によって自己 self と呼ばれているものと重複する面もある(『自我同一性』)。しかし、エリクソンの場合は、自己表象 self representation の発達の連続性が問題にされており、この自己表象の連続性は終始一貫して自我の働きによって営まれると考えられている。そして「子ども時代を通して身につけら

れる同一化群の中から有意義なものを選択的に強調し、さまざまな自己像を次第に一個の同一性に向かって統合していく課題を達成するのは、自我以外のどんな内的な働きでもない。私が同一性のことをまずはじめに自我同一性と呼んだのも、まさにこの理由からである」(『自我同一性』)と述べている。つまり、「自我」の働きによる自己像の統合のことであるから、自我同一性と呼んだというのである。

自己と自我について、エリクソンは自我が自己を知覚したり調整したりするという考え方に関して、今日、一般に認められているように、自我という言葉を主体として、自己を客体として定義するのは妥当であると考えている。そしてこの場合、自我は中枢の組織機関であり、生涯にわたって変化しつづける自己と対決しつづけるが、しかもこの変化する自己は、過去に放棄されたり、未来に予測されたりするさまざまな自己を統合するよう要求しつづける。そのような自己に対して自己同一性という用語をあてたという。つまり、自己同一性は、個人

の自己像と役割像とからなる統合された部分を意味するのであり、また、一時的な自己混乱が、社会的承認を確保できるような役割によって、或はより現実的な自己定義に対する社会的承認によってうまくおさまったときにそれは生ずると考えられている。したがって、同一性形成は、自己の面と自我の面の両面をそなえているということができるのである。

次に、超自我と自我理想と自我同一性という三つの概念の關係についてエリクソンがどのように考えているか、簡単に触れておこう。

フロイトによれば、子どもの超自我は両親の禁止的側面を取り入れる、つまり両親の超自我を模範として組み立てられる。その結果世代から世代へと伝えられたあらゆる不変の評価の担い手になる。超自我のイデオロギーの中には、過去が、そして種族や民族の伝統が生きつづけており、この伝統は現在の影響や新しい変化にはただ徐々にしか譲歩しないという。一方、親が「こうあってほしい」と願う側面を取り入れた自我理想は、個人の側

面と共に社会的な側面ももっている。すなわち、それは一つの家族、階級、国民に共通した理想であるという。

したがって、自我理想は、超自我に比べて、ずっと柔軟に、特定の歴史的時代の理想像と結びついている。ところが、自我同一性は、超自我や自我理想に比べて、社会的現実にもっと密接な関係をもっているといえる。なぜなら、自我同一性は、社会的現実の中で、自我にとっての下部組織として働き、子ども時代の心理、社会的危機から生み出された自己表象を検証し、選択し、統合しようとするからである。つまり、それはある程度、実際に得られるが、しかもたえず修正されていく自己の現実感覚として特徴づけられる。これに対して、自我理想の空想性は、たえず求められ、しかもけっして完全には到達されない一連の理想的目標を意味するものと、エリクソンはとらえている。

さらに、エリクソンは、発達期にある子どもは、その一歩毎に、経験に対処する自分独自のやり方、つまり彼の自我の統合が、自分の所属する特定の集団の同一性の

一つの成功例であるという自覚を通して、そしてまた、その集団の時間と空間および人生計画と自分のそれとが互いに一致し合っているという自覚を通して、生き生きとした現実感を獲得しなければならないと主張する。集団同一性については、たとえばアメリカ・インディアンのスー族の遠心的な同一性が報告されているが、そのような、その集団が成員の経験を組織づける基本的な方法を集団同一性と呼んでいる。そして、集団同一性が各自の自分自身の同一性の感覚を得るのを助けるといっているのである。

そして、そもそも個人的同一性をもっているという意識された感情は、同時に行なわれる二つの観察に基づいている。つまりそれは、時間的な自分の自己斉一性と連続性の直接的な知覚と、他者が自己の斉一性と連続性を認知しているという事実の同時的な知覚である。私が提示する自我同一性とは、この個人的同一性によって伝えられるような、単に存在するという事実以上のものであって、むしろこの存在の自我の特質に関する概念であ

る。したがって、その主観的側面からみると、自我同一性とは、自我のさまざまな統合方法に与えられた自己の斉一性と連続性が存在するという事実と、これらの統合方法が同時に他者に対して自己がもつ意味の斉一性と連続性を保証する働きをしているという事実の自覚である。」「(『自我同一性』)とも述べている。この記述を、R・コールズは『エリック・H・エリックソンの研究』(一九七〇年)の中で次のように再定義している。「個人的同一性という言葉を定義するならば、私にはかなりまともな永続的な生活がある。それは他者が認知することができる、他者が認知できるということを私が知っている、ということになる。そして、自我同一性とは、どのような状況においても、自分の精神には独自の性質と性格があり、しかもある程度他人と深く共有し合っているということを自分でかなり了解している状態である。」

また『International Encyclopedia of Social Sciences』(一九六八年)にエリックソンが執筆した『Psychosocial Identity』の中で、彼は、同一性を「私は誰なのか」



（“Who am I?”）という疑問に集約する今日流行の定義を一面的すぎるとして否定している。つまり、たとえば哲学的命題のように自己個人の存在を問うアイデンティティの概念とは異なり、同一性は心理社会的同一性としてとらえられるべきものである。それは主観的であると同時に社会的な側面をもつというように、多面的であることが強調されている。

したがって、同一性形成は、子ども時代に継続的に現われる危機を通して子どもに伝達される環境としての現実的な社会構造や自己の現実像に関する自我の統合機能を代表するという意味で、自我の働きである。また、同一性形成の過程においては、自我機能と社会機構の相互補完作用が重要な意味をもつことが示唆されている。

エリクソンの諸概念の説明はこのくらいにして、同一性の核の形成は、人生初期における母親との出会いにはじまるとする同一性形成の過程について、次回は話をすすめよう。そして、精神分析の領域にとどまらず、今では心理学、社会学、哲学、政治学の分野にまで広く採用

されるようになった同一性の概念の先見性とスケールの大きさ、奥行の深さなどについても明らかにしていきたいと思う。

（津田塾大学）

